美術科

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058149

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

美術科

西澤　明
共同研究者　鷲山　靖（金沢大学）

１．伝統文化教育を進めるに当たって

（１）伝統文化教育の目的の確認

教育基本法，学校教育法では，伝統と文化について以下のように示されている。

> 伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに，他国を尊重し，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。
> （教育基本法　第１章「教育の目的及び理念」，第２条「教育の目標」，５）
>
> 我が国と郷土の現状と歴史について，正しい理解に導き，伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに，進んで外国の文化の理解を通じて，他国を尊重し，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。
> （学校教育法　第２章，第２１条，３）

また，中央教育審議会の報告では以下のようにまとめられている。（下線部は筆者）

> グローバル化する中で世界と向き合うことが求められている我が国においては，日本人としての美徳やよさを備えつつグローバルな視野で活躍するために必要な資質・能力の育成が求められる。言語や<u>文化に対する理解を深め</u>，国語で理解したり表現したりすることや，さらには外国語を使って理解したり表現したりできるようにすることが必要である。こうした言語に関する能力を向上させるとともに，古典の学習を通じて，日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受していくことや，<u>芸術を学ぶことを通じて感性等を育むことなどにより，日本文化を理解して自国の文化を語り継承することができるようにするとともに，異文化を理解し多様な人々と協働していくことができるようになることが重要</u>である。
> また，日本のこととグローバルなことの双方を相互的に捉えながら，<u>社会の中で自ら問題を発見し解決していくことができるよう，自国と世界の歴史の展開を広い視野から考える力や，思想や思考の多様性の理解，地球規模の諸課題や地域課題を解決し持続可能な社会づくりにつながる地理的な素養についても身に付けていく必要</u>がある。
> （中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）』平成２７年８月２６日）

すなわち伝統文化教育の目的は，

① 自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め，尊重する態度を養い
② 外国の文化や歴史についても理解を深め，尊重する態度を養うことで

国際社会の平和と発展に寄与する資質，能力を育むことにあると言えるだろう。

（２）美術科と伝統文化教育の関連

伝統文化教育で育成を目指す資質・能力については，美術科の目標や学習内容と直接結び付く点が多い。前述の中央教育審議会の報告では，「伝統や文化についての理解は，他者や社会との関係だけ

ではなく，自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要である」とした上で，美術科について，

> 音楽，美術，工芸，書道など，芸術文化に親しみ，自ら表現，創作したり，鑑賞したりすることが，伝統や文化の継承・発展に重要であることは言うまでもない。特に，伝統的な文化にかかわっては，音楽科や図画工作科，美術科では，唱歌や民謡，郷土に伝わる歌，和楽器，我が国の美術文化などについての指導を充実し，これらの継承と創造への関心を高めることが重要である。

と記されている。（下線部は筆者）

また，令和三年四月から施行される新しい学習指導要領では，教科の目標に「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成」が掲げられており，内容には「身近な地域や日本及び諸外国の文化遺産などのよさや美しさなどを感じ取り，美術文化について考える（１年生鑑賞）」「日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから，伝統や文化のよさや美しさを感じ取り愛情を深めるとともに，諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気付き，美術を通した国際理解や美術文化の継承と創造について考える（２・３年鑑賞）」「日本及び諸外国の作品の独特な表現形式，漫画やイラストレーション，図などの多様な表現方法を活用できるようにする」「国内外の児童生徒の作品，我が国を含むアジアの文化遺産についても取り上げる（指導計画の作成と内容の取扱い）」と示されている。

（３）教科の思考力・判断力・表現力と伝統文化教育

美術科の学習活動は，作品の制作意図のよりよい実現のために表現の方法を発想・構想し，創意・工夫を試みる繰り返しであり，まさに思考力・判断力・表現力が求められる。美術科ではこれまでの実践研究で，教科の思考力・判断力・表現力を「学習活動における課題を，さまざまな方法を用いて考え，伝える力」と捉えており，その力の基盤になるのは個々の「感性」だと考えている。それは，学習指導要領に示された教科の目標「豊かな感性や情操の育成」に合致すると同時に，伝統文化教育で育成を図る「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」の基盤でもあると考えられる。さらに，今後の大きな課題である Society 5.0 において求められる力についても，自分で考える力，情報を読み解く力，自らの考えを表現し伝える力，科学的・論理的に思考する力，好奇心・探求力などと並んで，「価値を発見する感性」が挙げられている。

（４）伝統文化教育で育む感性

感性，とりわけ日本人としてのアイデンティティーを支える感性については，日本の季節の変化と，そこで生活する人々の思いから生まれ，育まれるものだと考えている。

例えば「四季」には明確な節目があるわけではなく，自然の姿や色彩は常に微妙に変化し続けている。日々，姿や色彩が変化する季節の中で暮らす日本人が，その繊細な変化に気付く感性を高めてきたことは間違いないだろう。また，秋になり葉を落とす木々，冬の白い雪に覆われた風景や，そこに黒々と立つ木々の姿は，侘び寂びの精神や余白に対する美意識を育み，明るく柔らかな風景に対するあこがれを育んできただろうことも想像に難くない。

こうした考察から，**伝統文化は，単に「古くから伝わる事柄」を指すのではなく，その背景にある「日本の四季の変化」と，そこで暮らす人々の「日本人の繊細で豊かな感性」**と捉えることにした。

２．能力・態度の育成に当たって

（１）学校全体として育成する資質・能力について

本年度，本校の研究では，学校全体として目指す「伝統文化教育を通じて育成する資質・能力」について，以下の三つとしている。

① 日本の伝統や文化に関する理解 ② 伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度 ③ 文化の伝承・創造への主体性など

これまで，伝統文化に関わる授業として，いくつかの計画，実践を行ってきている。その内容について，上記①～③の目指す資質・能力と照らし合わせてまとめると，以下のように分析できる。

「樂茶碗」の制作

桃山時代から今日に至るまで続く樂茶碗を題材として取り上げた。ろくろによる均一な成形の碗にはない武骨な形と，刷毛で塗られた釉薬の濃淡や，焼き加減によって偶然生まれる色を楽しむ文化は，日本が潜在的に持ち，大切にしてきた侘び寂びの心である。学習内容としては，樂焼きの伝統や文化，歴史についての知識理解を図った上で，実際に手捏ねによる造形と釉薬掛けを行った（①日本の伝統や文化に関する理解）。技能の差ができにくい素朴な作業は，多くの生徒が関心を持って取り組むことができ，主体性や積極性の育成が期待できると考えられる（③文化の伝承・創造への主体性など）。

「金沢のポスター」の制作

新幹線の開通以来，金沢にはたくさんの人が訪れている。県外からの来訪者に金沢の伝統や文化を紹介するポスターを題材として取り上げた。自分達が暮らす身近な地域のよさについて考え，再確認，理解すること，その表現に伝統的な和の色や模様を取り入れることで，我が国の伝統に対する理解が深まると考えた（①日本の伝統や文化に関する理解）。また，ポスターいう表現方法は世界共通の伝達手段であり，グローバル社会におけるコミュニケーションの方法であることの理解も，伝統文化教育の目的に合致していると考えられる（②伝統文化への理解に基づいた多様な文化を尊重する態度）。

「落ち葉のスケッチ」「柏葉のスケッチ」の制作

校地内に植えられた木々の葉をスケッチすることで，季節とともに変化する自然の美しさに気付き，味わうことを狙った（①日本の伝統や文化に関する理解）。１年生で取り上げた「落ち葉のスケッチ」では，美しく紅葉した桜の葉を描き，３年生で取り上げた「柏葉のスケッチ」では，校章でもある柏の葉を描いた。紅葉の多様な色彩はもとより，緑色一色の柏の葉にも日本人は繊細な色の違いを大切にし，様々な色名をつけて楽しんできた。その知識を学び，表現活動に活かす活動は，先に述べた「日本の四季の変化」と，そこで暮らす人々の「日本人の繊細で豊かな感性」の育成だと考えられる。

「日本手拭のデザイン」の制作

古くから日々の生活で使われ，現在も使われ続けている日本手拭を取り上げた。さらに，伝統的な道具をテーマにすることで，他教科からのつながりがしやすくなることも狙った。

「日本手拭」についての基本的な知識学習を踏まえたあと（①日本の伝統や文化に関する理解），「日本らしさ」をテーマに単位ユニットのデザインを考え，消しゴムハンコを作った（③文化の伝

承・創造への主体性など）。単位ユニットのハンコが完成後，ユニットが連続するパターンの「和の模様」や，「和の色」，「余白の美」などについて学習を行い（①日本の伝統や文化に関する理解），その知識を活かしたハンコの押し方を考えた（③文化の伝承・創造への主体性など）。教科の学習事項としては，ユニットデザインの「事物の単純化」，連続するユニットのパターンの「レイアウト構成」，消しゴムハンコ作成の「凸版・彫刻刀の基本的知識」，和の色の再現の「混色による色の使用」等が考えられる。

（２）関連・連携を図った教科等について

前述のように，美術科としては，伝統文化は単に「古くから伝わる事柄」を指すのではなく，その背景にある「日本の四季の変化」と，そこで暮らす人々の「日本人の繊細で豊かな感性」と捉えており，今後も「日本の四季の変化」や「日本人の繊細で豊かな感性」といったテーマで他教科との関連・連携を図りたいと考えている。しかし本校研究では「伝統文化」をどう捉えるかについての共通理解が弱く，教科のつながりは，伝統文化に対する「古くから伝わる事柄」といった漠然としたイメージで行われているように思われる。

美術科の学習における表現活動の目的は，発想・構想の能力や創造的な技能の育成であり，具体的な題材やテーマは，各学校の実情や教師の判断にゆだねられ，設定される場合が多い。そのため，他教科等の教科書や年間指導計画に示された題材名や学習事項とつながりを持ちやすいが，逆に他教科が美術科の題材からつながりを見つけることは難しいようだ。

そうした状況を踏まえ，今年度は「日本手拭」という具体的な事柄を題材とすることで，他教科との関連を見出しやすくしようと考えた。可能性としては，手拭が盛んに使われるようになった江戸時代の，綿花の栽培や粋の文化についての学習を社会科の視点で，手拭を使った物の包み方や服飾との関わりについての学習を家庭科の視点で等を考えていたが，実際には関連・連携の実現を図ることは難しかった。

３．成果と課題

「日本手拭のデザイン」の単元は，前後半，大きく二つの学習活動から成り立っている。生徒が学習活動において主題を考える際の基本のテーマについては，伝統文化教育と美術教育，それぞれの学習目的を踏まえ，以下のように設定した。単元前半の，連続する単位ユニットのデザインを考えて消しゴムはんこを作る活動では「日本らしさ」をテーマとし，単元後半の，手拭の柄のデザインを考えてはんこを押す活動では「和の意匠」をテーマとした。

作品完成後に生徒からとった記述式アンケートでは，前半の「日本の四季や文化」というテーマについて，以下のような記述が見られた。

・最初，テーマが「日本らしさ」だったので，どんなものにするかすごく悩みました。
・この授業では，日本らしさをイメージするということで，「日本らしいって何だろう？」と思っていましたが，日本で作られたもの，日本にしかないものと考えた時，色々なものが浮かんできました。
・「日本らしさ」をテーマに掲げることで，日本らしさとは何かについて考えることができました。
・あらためて日本らしさを考えることで，日本のイメージを実感することができました。古くから伝わる模様を学習しましたが，これからもその模様は伝えていきたいです。
・日本らしさについて考え，友達と話し合い，自分では思いつかなかった日本らしさをたくさん発見

することができてとても楽しかったです。

「日本らしさ」というテーマについてのこうした感想からは，考えることで，意識が高まったり，あらためて発見があったりしたという成果も見られるが，同時に「日本らしさ」とは何かを考えるのは難しかったという意見もあり，教師側が感じている「日本の伝統文化」とは何かという前提の不明瞭さに通じるものがあるように思う。すなわち，今後の伝統文化教育における課題としては，活動や研究の前提として「日本らしさ」や「伝統文化」についての共通理解を図ることが重要だと考えられる。

本校における「伝統文化教育」をテーマにした研究は今回でいったん終了になるが，今後の方向としては，やはり「日本の四季の変化」と「日本人の繊細で豊かな感性」をテーマに，他教科との関連・連携を図ることが重要だと考えている。例えば「日本の四季の変化」については，社会科や理科の学習事項と直接つながりがありそうだし，英語科の学習活動で「日本の四季の変化」をテーマに発表や会話を行えば，つながりが生まれるだろう。「日本人の繊細で豊かな感性」についても，例えば美術科における余白の美は，国語科における俳句や短歌の数少ない言葉の奥にある世界や，音楽科における雅楽の音階やリズムが持つ幽玄さ，保健体育科の武道や踊りにおける動きや精神といった事柄と共通の，日本人ならではの感性であると考えている。

実践事例

美術

学年	関係・連携の考えられる教科等
2　年	国語・書写・社会・理科・技術・家庭

授業内容

我々が日常生活で使用する器は，左右対称で破たんのない，文字通り美しく整った形が多い。今回は手づくねによるいびつで歪みがある器の美しさを学習する。

学校で扱う焼き物の活動において，子どもたちの未熟さから現れる“意図しない面白さ”を評価する視点も大切だが，中学生の発達段階としては物足りない。今回の授業では，「意図しない未熟さ」から一歩抜け出し，樂茶碗に代表される，歪みや破たんのある形や釉薬の偶然の色彩の美しさやよさを“意識・意図”させ，日本人が持つ「わびさび」に代表される繊細な価値観を育てることをめざしている。

教科等で身に付けたい力（本時について）	育成したい資質・能力
• 樂茶碗の学習を通して，そのよさや美しさを感じ取る感性。【鑑賞の能力】 • 手づくねの制作技法の理解と，実際に制作する技能【創造的な技能】	① 日本の伝統や文化に関する理解 ③ 文化の伝承・創造への主体性など

授業のポイント・流れ

1.　動画で樂家の茶碗制作についての動画を視聴する。(1時間)
　十五代に及ぶ楽家について知ると同時に，楽家と千利休との関わり，**侘茶の美について学ぶ。**

2.　陶土を練る。(0.5時間)
　練らずに使える教材用陶土だが。あえて土をこねる感触を体験し，味わわせる。

3.　樂茶碗の作り方の動画を視聴（0.5時間）
　手づくねの手順について理解する。

4.　制作に入る（3時間）
①　輪積みではなく手づくねで立ち上げていく。
　できるだけ薄く作ることで，次の削りの量を減らす。
②　かきとりべらを使って表側を整える。
③　できるだけ薄くなるように内側を削っていく。
　壊れやすい作業を通して，心をこめた丁寧な取り組みを促し，**自分の作品を大切に扱う気持ちを育む。**
④　高台の削り出しを行う。

実践事例

美術

学年	関係・連携の考えられる教科等
3　年	国語・書写・社会・技術・家庭

授業内容

江戸時代に入り，綿花が国内でも栽培されるようになったことで，庶民の生活に欠かせない存在になった日本手拭いは，現代においても広く使用されており，生徒にとってもよく知った生活道具である。その歴史や，粋を楽しむ文化を知ることは，日本人の感性の理解につなげたいと考える。さらに，和の模様や和の色について学ぶことで，単純化されたユニットや連続するパターンの美しさ，彩度を押さえた色の美しさを知り，自分自身で意匠をデザインすることにより，日本の美術文化の伝承，創造の意識を高めることを目指している。

教科等で身に付けたい力（本時について）	育成したい資質・能力
• ハンコ（凸版）制作の知識・技能 【創造的な技能】 • テーマの事物の単純化と連続パターンの美しさを理解し，自ら構想する力 【発想・構想の能力】	① 日本の伝統や文化に関する理解 ③ 文化の伝承・創造への主体性など

授業のポイント・流れ

1. 日本手拭いの基礎的知識の理解。(0.5時間)

材料や歴史を踏まえ，江戸時代から今に至る粋の文化について考える。

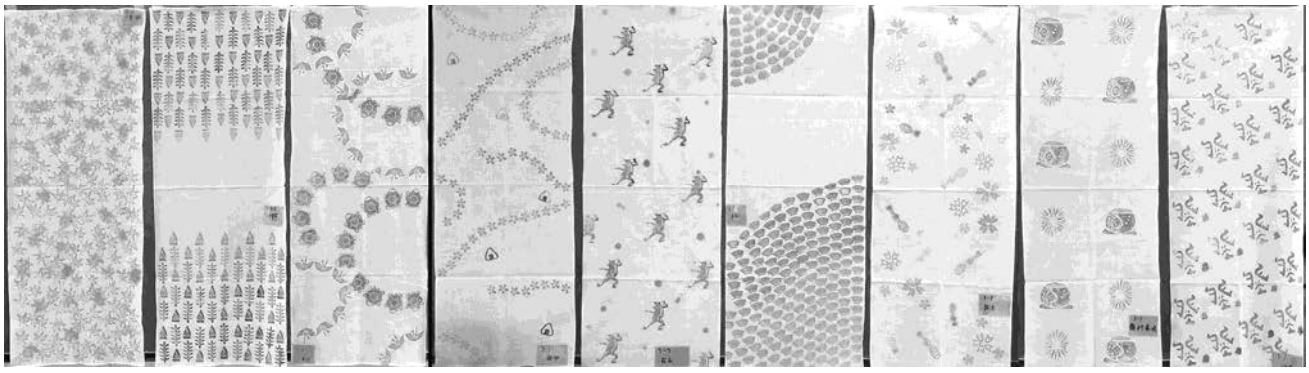
2. テーマを考える。

日本の四季，日本らしさを表現するテーマを考え，テーマを表す事物を単純化した，単位ユニットのデザインを考える（1.5時間）

3. ユニットデザインの下絵をゴム板に転写し，彫り進める（3時間）

下絵を削り取ってしまわないように，彫刻刀の使い方を考える。

4. 版を彫り終わったところで，連続したパターンの配置，配色を考えながら，手拭いと同サイズの紙に試し押しする。(1時間)

5. 本番。手拭いの布にハンコ押し。(3時間)

伝統的な和の模様を参考にしながら，ユニットを様々な並べ方で押してみる。ユニットの彫りが雑になっても，パターンができることで美しいデザインになっていくことを実感する。